

奥の宝塔および宝篋印塔

奥の宝塔および宝篋印塔は奥区にあり、和歌山県の文化財に指定されている石塔です。奥公民館の北約100mの地点にあります。以前は現在地よりも約300m南に所在していました。元々の場所は「堂の芝」という地名が残り、周囲にはかつて極楽寺という大きな寺院が存在していたと伝わります。

北側にある石塔は宝篋印塔で、高さは約2mあります。宝篋印塔とは、宝篋印陀羅尼ほくきょういんだらにというお経を納めたことに由来する塔で、日本では木造や銅造の小塔も造られました。鎌倉時代以降には主に供養塔や墓碑として石造の宝篋印塔が盛んに造立されるようになりました。基礎には4行にわたって銘文が刻まれており、文中2年(1373年)に亡き祐春ゆうしゅんの三十三回忌供養として石塔を建てたことが記されています。

南側の石塔が宝塔で、高さが約1.7mあります。宝塔とは、円筒形の塔身とうしんに屋根がのる一重の塔のことで、彫刻によって屋根の棟や扉が表現されています。基礎には5行にわたって銘文が刻まれており、文中3年(1374

年)に仏の恩と先祖の徳に報いるためにこの石塔を建てたこと、石塔を建てるという善行によって命ある全てのものが救われることを祈願すると刻まれています。

奥の宝塔および宝篋

宝篋印塔(左)・宝塔(右)



宝塔の屋根・扉の表現



印塔が造立された南北朝時代には、藤並地区は藤並氏という武士が地域を支配していました。当時は石塔を造立できるのは地域の有力者などごく限られた階層の者であり、また石塔の規模も比較的大きなものであることから、藤並氏が造立した可能性が考えられます。奥の宝塔及び宝篋印塔は、ともに造立年代・趣旨が明らかであり、造形的にも優れた貴重な文化財です。